

佳作

わすれんぼのひいちゃん

岡山県 総社市立総社中央小学校六年 小野 風太

「ひいばあちゃん風太だよ。」

「ふーた…。」

これが、ひいばあちゃんとはくの最後の会話。あれからもう、二年くらいたったかな。

ぼくのひいばあちゃんは、認知症だ。しかも結構ひどいらしい。ぼくが小さいころは、ばあちゃんの家において、夏休みに泊まりに行くと、一緒にラジオ体操に行ったり、トランプをしたりしていた。冬休みに行く時、おもちつきをして、一緒におもちをまわしたりもした。ひいばあちゃんは小さい子が好きみたいで、ぼくや、ぼくの弟をよくかまってくれた。なのに、いつごろからだったか、デイサービスに行くようになってから、むかえの車を朝早くからずっと外で待っていたり、デイサービスが休みの日も曜日を間違えて、外に出ようとしたりしていた。

ある年に、ばあちゃん家へ行くと、一緒に住んでいたひいばあちゃん、ひいじいちゃんが居なくなっていた。

「二人で留守番が大変になったから、老人ホームに入ったよ。」

と、じいちゃんが言った。それから、一年に二回ばあちゃん家に行くときは、必ず老人ホームへ会いに行くようになった。ひいじいちゃんは、

「風太は何年だ。」

といつも聞く。耳は遠いけれど会話はできる。でも、ひいばあちゃんは、知らない人を見るみたいになじつとぼくを見るだけ。

「ふーた…。」

弟の名前は言えなかったけど、ぼくの名前だけは言ってくれた。あの時以来、ひいばあちゃんの声を聞いていない。認知症が進んで、しゃべる言葉をわすれてしまった。それだけじゃなくて、トイレへの行き方とか、ご飯の食べ方とか、ひいばあちゃんとはぼくが会いに行くたびわすれる事が増えていった。

そして、この夏会いに行ったら、ひいばあちゃんは点滴をしてベッドにねていた。じいちゃんが、今ひいばあちゃんは脱水症状になっていて、ごはんも

元々少ない量の十分の一しか食べていないと、教えてくれた。ぼくはその時、ひいばあちゃんが死ぬかもしれないと思った。もう一人では何もできない、ひいばあちゃん。

じいちゃんにとって、ひいばあちゃんはお母さんだ。そのお母さんがこんな状態になって、もうじいちゃんのことも分からない。じいちゃんはどれだけつらいだろうと思った。そして同時に、ぼくのお母さんもこんな状態になったらと思った。ぼくの胸は、悲しみでいっぱいになった。

ひいばあちゃん。ぼくのこと、わすれたと思うけど。ぼくはひいばあちゃんのこと覚えてるよ。これからも、ずっとわすれないよ。